

Title	中村菊男著『松岡駒吉伝』
Sub Title	K. Nakamura : A biography of Komakichi Matsuoka
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1964
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.37, No.3 (1964. 3) ,p.105- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19640315-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

づけているものがあつたのである。』(三頁―四頁) というが意味深き言葉と思われる。(未来社 三三〇頁 八五〇円)

(多田真勲)

中村菊男著

『松岡駒吉伝』

新憲法下初の国会において衆議院議長の席についた松岡駒吉は明治二十一年四月八日に鳥取県の片田舎に生まれた。

学歴といえは高等小学校を卒業しただけである。その後の彼は郵便配達、機械工、職工の道をあゆみ、大正三年二十六歳のとき労働運動に入った。

わが国の労働組合運動は明治三十年ころからはじまるが現在の運動は明治のそれとまったく関係がないといつてよいであろう。今日の運動は大正元年に鈴木文治によつてはじめられた友愛会Ⅱ日本労働総同盟の運動の流れを継承している。松岡駒吉は友愛会が発足して三年目に鈴木文治の協力者として運動に参加したのである。

一昨年、日本労働総同盟は創立五十周年記念大会を盛大に挙行したが、この総同盟の運動はそのままわが国労働組合運動の本流を形成するわけである。このことと松岡駒吉が大正六年に友愛会本部員

となりその後本部会計部長、主事、昭和七年からは総同盟会長に就任したことを考えあわせると松岡の存在を無視してわが国の労働組合運動の歴史を語ることができないことになる。このように重要な地位にいた松岡がその重要さとは逆にこれまで軽視もしくは無視されてきたのであつた。

日本社会運動史を研究する人びとのあいだには奇妙な偏見がある。それは実際にどれだけ労働者大衆の権利と生活を守り向上させたかということが研究対象になるのではなくて、その運動やストライキがいかにラディカルであつたか、あるいはその考えがいかに尖锐であつたかということが好んで研究対象とされる。ラディカルで尖锐でありさえすればそのストライキが惨敗し、その考えが主唱者だけのもので大衆に背を向けられようともし高い評価があたえられるのである。こうした研究態度から生まれてくるものは歴史の実態から浮きあがつたものであり、いわば虚構の歴史である。

わが国の社会運動史を学び研究する者にとつてもつとも悲しいことは具体的な事実にもとづいた実証的な歴史書もしくは研究論文になかなかめぐりあえないということである。早い話がわが国の労働組合の運動をありのままに正しくつたえた通史は今日まで一冊も存在しないといつても決して過言ではないという有様である。こうした状況のなかで中村菊男教授がこのたび『松岡駒吉伝』をあらわしたということは一歩どうの意味をもつてであろうか。『松岡駒吉伝』はいふまでもなく松岡駒吉という一個人の人間の伝記である。それは一人間の歴史をつづつたものであつて日本労働組合運動史全体をし

めそうというものではない。しかしながらこの一伝記は今後の運動史全体の研究に大きな衝撃をあたえずにはまい。今後この方面の研究者は本書を無視していかなる研究もなしえなくなるだろう。

松岡の生涯は友愛会・総同盟の歴史にびつたりと密着している。

この団体をつくつたのは鈴木文治であるが、これを育てたのは松岡であるというのは誰しも認めているところである。そして総同盟の活動は戦前の労働運動のすべてとはいえないまでも本流であつたことは間違いない。大正の中頃の労働運動はアナキズムによつてゆきぶりをくらう。そしてそれ以後から昭和の初年にかけてはマルクス主義に大きくゆさぶられる。満洲事変以後はこんどは軍国主義的

風潮が労働組合運動の発展を妨害するようになる。右から左から大きなあおりをくらいながら常に中道を歩もうとする総同盟の幹部の努力は今日まだ正当に評価されておられない。正当に評価されておられないどころか総同盟の幹部といえば「ダラ幹」「労働貴族」といわれて蔑視されてきている。ダラ幹、労働貴族といわれるのはアナキズム流、あるいはマルクス主義流の革命的な闘争をしないということと会社から金をとつて買収されるということとをあげて左翼から批判されるわけである。この点について松岡をみよう。クリスチャンであつた松岡は地上に天国を築こうという理想に燃える。この理想に反するものは共産主義者であり、彼らは目的のためには手段を選ばない、個人の道徳感にそむくようなことを平気でやる、ということから松岡をして信念的な反共主義者にした。それは盲目的な偏見ではなく実践の中で幾度となく共産主義者からうけた裏切り妨害

から学びとつたものであつた。これまでに出た運動史の多くはマルクス主義と共産主義者だけが労働者の解放のためにたたかつてきたとされているが、これは誤りであつて彼等は運動を分裂させ、行詰らせるというマイナス効果をあげることに積極的であつた。したがつて共産主義者の戦略戦術から組織を防衛することは労働組合運動のうちできわめて重要な分野であつた。その点を松岡を通じて白日の太陽の下に明らかにした本書はこの方面の研究に一時代をひらいたものといえよう。

松岡はまた金にたいして厳格な人であつた。争議ともなれば会社側は争議の指導者を買収することによつて事態を納めようと考える者が多い時代であつたが、松岡はそういう金は全く問題にせず受けつけなかつた。オルグに出かけた先から本部へ報告する通信のなかで家族への伝言を一行でも入れてあると帰京したときその分だけ支払うという几帳面さであつた。松岡をおとしめようとする人々が組合の金を私用したという訴えをおこしたが、調べにあつた係官は松岡の一銭もゆるがせにしない会計簿をみてひきさがつたという。この几帳面さと会計の確かさを備えた松岡は長年総同盟の主宰もしくは会計部長のポストにあつて総同盟の財政的基盤を不動のものに確立するという功績をあげたのであつた。

友愛会を創立して初代会長になつた鈴木文治は清濁あわせ呑むという茫洋としたところがあつて、草創期の会長としては適任であつた。しかし左からの攻勢がはげしくなりこれへの対抗と防衛が必要となるころになると左翼にたいする激しいファイトをもつ松岡的人

物が登場してこなくては組織は防衛できなくなる。また組織が膨大になりその財政も複雑化してくると大雑把な鈴木よりこの方面における才能をゆたかに備えた松岡の存在が光ってくるのである。松岡が昭和七年に総同盟会長のポストに就任したのはまた当然であつた。

松岡が会長に就任した昭和七年といえは、満洲事変が勃発した翌年で軍国主義的風潮が国内を吹きまくりはじめたところである。労働運動の前途も多難を思わせた。日華事変に突入すると産業報国運動が上からおこされ大日本産業報国会が結成された。松岡は日本人として「産業報国」そのものには賛成したが、そこに労働運動の終末を感じとつたとき終始一貫して頑固なまでにこれに抵抗した。圧倒的な時代の流れに最後の最後まで抵抗してついに昭和十五年七月七日総同盟は解散したが、松岡はその後敗戦にいたるまでいつさいの公的な活動をおこなわなかつた。他の多くの労働運動の指導者がそのまま産業報国運動にうつつていつたのにたいして松岡は友人のすすめ、政府官憲の勧誘脅迫にあつても頑として産業報国会への参加を拒みつづけた。細谷松太がいつているように「要するに日本の労働運動で、ただ一人戦争に対しての非協力者があり、同時にあの当分の一つの戦争権力に対する強い抵抗をした人間があるとすれば、それは松岡駒吉一人なんだ。日本にはそのほかにいないんだ」(二〇頁)ということになるのである。

ダラ幹といわれ、労働貴族とののしられた総同盟の幹部の一人松岡とはいま述べたような人物であつた。左にたいしても右にたいし

ても強く抵抗して労働者の団結と権利を守り通そうとしたその精神はどこから発してくるのか、また汚れた金は一銭もとらなかつたというその潔癖さはいつたいどこからくるのか、と本書を読みおわつて考えた。それは彼がキリスト教徒であつたからであろうか。それもあつたであろう、しかしすべてのキリスト教徒が松岡のようではなかつたことも考える。彼がキリスト教徒であつたということだけで問題はかたづくものではない。彼が観念論者でなく現実主義者であつたのは出生が生粋の労働者であつたことによるであろうが、すべての労働者がごとく観念論者でないかというと思つてもそうとはいえない。

そうした興味深い課題をもつた人間松岡駒吉は敗戦後冒頭にふれたように新憲法下初の国会の議長になり、しかも後世にその名をとどめる「名議長」とまでいわれたのは、総同盟会長として長年その手腕をふるつた経験がものをいつたことでもあつた。しかしただそれだけの技巧的な面のみで彼が「名議長」といわれるはずがない。彼がそういわれたのは与野党の議論を十二分につくさせるという公平さにあつた。社会党に党籍をもち社会党内閣の与党出身議長であるにかかわらず反対党にも十分議論をつくさせるというところは総同盟にあつて公金を一銭といえども私用しなかつたという公正さからでいたものであろう。

中村菊男教授が松岡と親しく交わられたのは戦後のことであり、したがつて戦後の松岡を叙述する部分は当然のことながら戦前の部分以上に生き生きとえがかれている。伝記を書くということは伝記

者が自分を書くことでもあるという。その点で本書の戦後の部分は松岡と中村教授とが一体となつて書かれていて、読者を思はずひきつける魅力をもっている。

第二の魅力は、中村教授の広い学識が十二分に駆使されていることである。たんに国内の社会主義・労働運動史の知識のみでなく政治史、外交史、国際的な社会運動史等といった学識をフルに動員されて、そうした広い見地から松岡が演じた役割りを見きわめようとしていることである。

第三の魅力は、これまで一度も使用されなかつた資料が意識的に四百頁近い本書のなかにナマのままふんだんに盛り込まれていることである。社会運動史の研究者はこの豊富な新鮮な資料に心を奪われるであろう。

松岡駒吉という偉大なる労働運動の指導者があるがままの姿で歴史のなかに位置づけ、また彼の指導した総同盟をこれまた正当なる位置づけをかくもおおがかりな仕事のなかでされたのは中村教授がはじめてである。教授のその業績は後世をまつまでもなく、すでに今日まきらかである。教授はこの仕事の中で過労に倒れるという目にあわれたが、病の床にあつてもこの仕事に打ち込まれた。それは傍目にも恐るべき執念として写つたが、教授のこの打ち込み方とまた三三四頁にかかれていますようにかくもゆたかな協力者、アシスタントをもたれているという教授の人徳とがこの仕事を完成させたのであつた。その甲斐あつて昨秋出版記念会がもたれたとき清瀬衆議院議長、森戸辰男氏、大橋労働大臣、河上丈太郎社会党委員長そ

の他各界の名士数百人が本書の出版と教授の業績を祝されたこともここに記しておくべきだろう。(経済往来社 並製 一、二二〇〇円、上製 二、五〇〇円)

(中村勝範)

浦田一晴著

『責任保険法論』

責任保険契約とは、損害賠償責任に関する保険契約——すなわち、被保険者が第三者に対して一定の給付をなすべき責任を負担するにいたつた場合に、その損害の填補を目的とする保険契約である。わが商法典中には、責任保険に関する法規は、一、二を数えるのみであるが、実際の保険取引においては、各種の賠償責任保険が最近大いにその地歩を占めるにいたり、また自動車損害賠償保障法・原子力損害の賠償に関する法律・原子力損害賠償補償契約に関する法律等の単行法の立法もなされるにいたつている。このような、責任保険契約の近時における発展は、本書によれば、企業体の賠償責任の場合において、その民事責任が過失責任主義から無過失責任主義へと拡大されて来たことと対応して居り、そして今日、企業上の責任が実質において保険制度へ移行転嫁される機運が醸成せ